

飛田多喜雄「国語科教育方法論」の考察

—『話方教育の実践形態』について—(その8)

お茶の水女子大学附属中学校

花田 修一

『国民学校 話方教育の実践形態』(1941<昭和16>年1月18日発行・B6版・270頁・啓文社・定価2円30銭)は、飛田が33歳の時、成蹊学園(小学校)訓導時代に著した4冊目の著書であった。

本書のはしきで、「今回の国民学校教育機構では、国語教育における文字言語と音声言語の調和的充実を積極的に要望している。〈中略〉特に音声言語教育としての話し方を積極的に表面に押し出し強張している事は革期的な前進であると思う」と述べ、話し方教育の実践の重要性を説いた。

本書は「第一章 日常言葉の風景」「第二章 国語教育の新体制」「第三章 話し方教育の新秩序」「第四章 良い言葉の性格」「第五章 話し方教育の基本条件」「第六章 言葉の二面性と敬語」「第七章 話し方教育の機会」「第八章 話し方の指導法」「第九章 聞き方指導の方法」の九章から構成されている。

本発表では「第八章 話し方の指導法」を中心に取り上げることにした。ここには「朗読の指導」「話し合いによる言葉の躰」「生活の言語発表」「童話の口頭発表」「基本的口習い」「その場の言葉直し」「学年的指導目あて」などの内容について実践的提案がなされている。

本書が出版された2月後、1941年3月1日「国民学校令」が公布され、70年間続いた「小学校」は「国民学校」と改称された。教育の本趣を「皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為ス」とした「国民学校」は、「国語科」を「国民科国語」と改称し、その目標も「国民科国語ハ日常ノ国語ヲ習得セシメ其ノ理會カト発表カトヲ養ヒ国民的思考感動ヲ通シテ国民精神ヲ涵養スルモトス」と定めた。

このような状況下で、飛田はどのような「話し方の指導法」を提示したのか。今日的観点から検討し、考察をしたいと思う。